

SPS 春合宿セミナー
現代地球科学史研究と資料保存

戦後科学技術史研究プロジェクト の経験：南極観測と地団研

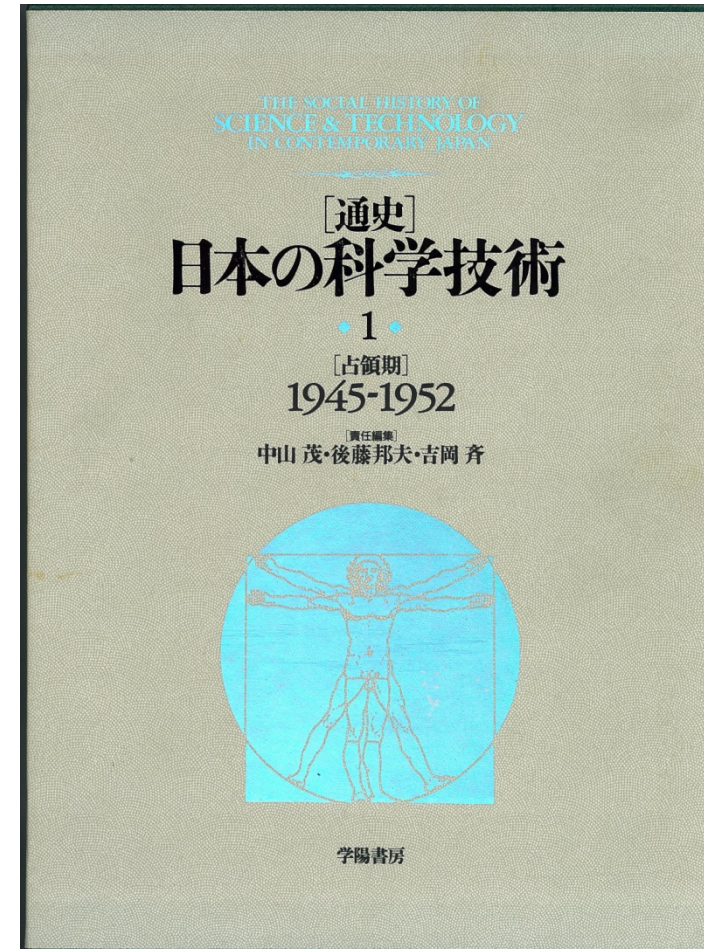
八耳俊文

(青山学院女子短期大学)

2012年3月11日 於：東京工業大学・本館

内容

- はじめに
- 自己紹介
- 戦後科学技術史研究
プロジェクトとは
- 「学界の民主化とレッド・
ページ」の執筆
- 「南極観測」の執筆
- 完成できなかった「占領
軍の科学技術政策」
- 現代史執筆と資料問題



はじめに

戦後日本の科学技術は官産学の連携のもとに進展したとの歴史叙述に対し、市民の役割を評価し、民の視点より叙述したのが『通史 日本科学技術』である。1995年、1999年、2011年と完成させ、対象は戦後から同時代まで及ぶ。この研究プロジェクトのはじまりは、中山茂を代表とする「科学と社会フォーラム」にあり、演者は1980年代後半より同フォーラムに参加、終了期には事務局を務め、『通史 日本科学技術』の編集に立ち会った。この体験を振り返るとともに、演者が地学から科学史へと転じた時代が日本の科学史研究の一つのピークであったことを示す。▼参画したのは1995年刊行の全4巻までであるが、当時インターネットは一般的でなく、収集資料の保存法については定めることができなかった。

自己紹介

地学から科学史へ

1975 名大・理 入学

1977 地球科学科 進学

理学部祭「何のための科学か」

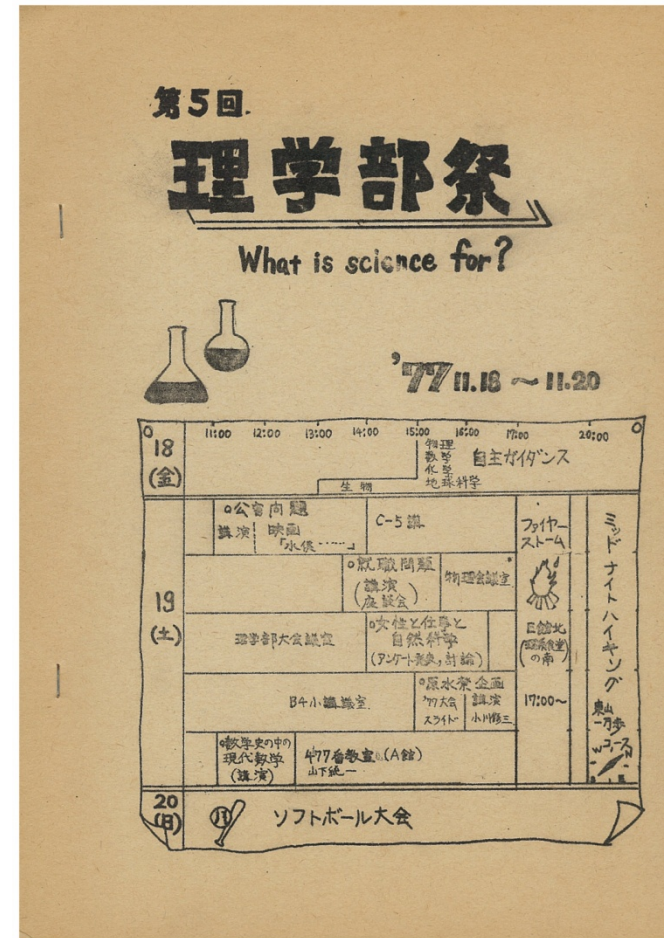
1979 名大院(M)入学

1981 東大院(M)入学

科学史・科学基礎論

1987 東大院(D)退学

<1970s ~ 1980s>



学部時代の1977年1978年に発表された図書や論文

1) 日本科学史

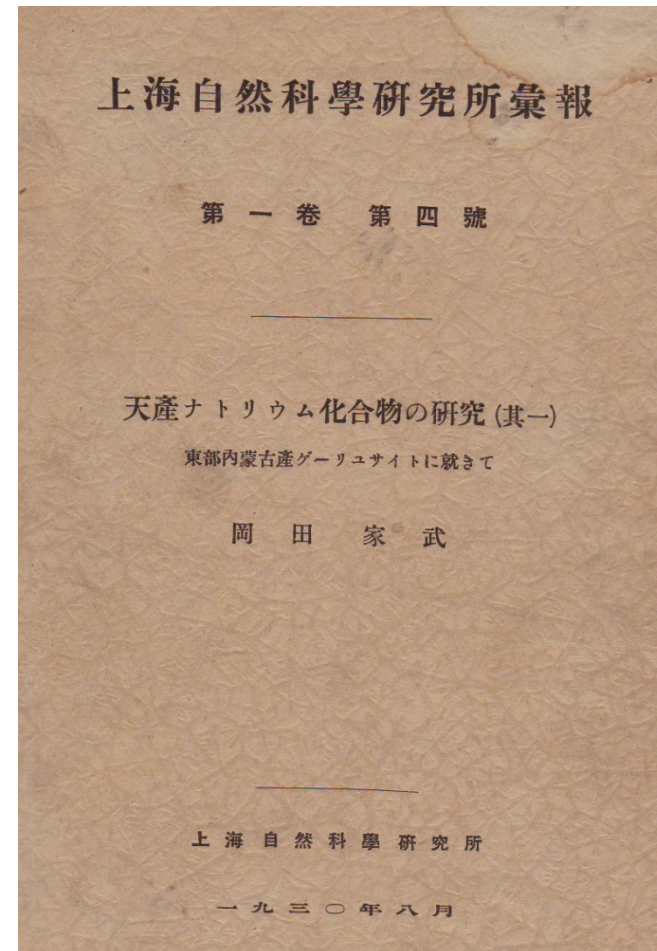
- 1973.11 廣重徹『科学の社会史』(自然選書)
1977.2 中山茂『日本人の科学観』(創元新書)
1977.4 B.ディクソン『何のための科学か』(紀伊國屋書店)
1977.8 村上陽一郎『日本近代科学の歩み』(三省堂選書)
1978.1-9 『復刻 日本科学古典全書』
1979.10～ 吉岡齊「科学者は変わるか」『日本読書新聞』

2) 地学史

- 1978.8 土井正民「わが国の19世紀における近代地学思想の伝播とその萌芽」
1978.12 今井功・片山正人『地球科学の歩み』(共立出版)

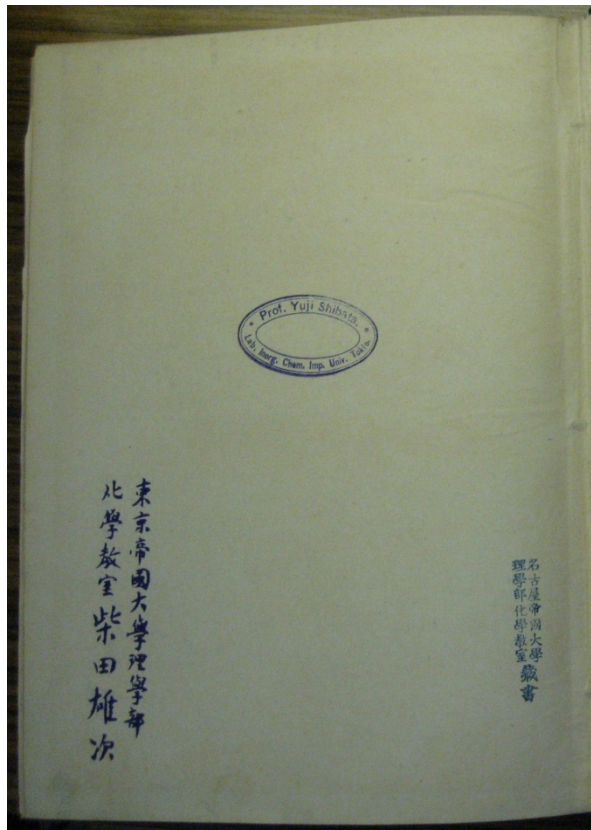
3) 岡田家武

- 1975.6 松尾禎士・山崎一雄「日本の地球化学の一断面」『地球化学』



名古屋大学理学部化学科図書室に残る「柴田雄次と岡田家武」

柴田雄次旧蔵『日本化学会誌』



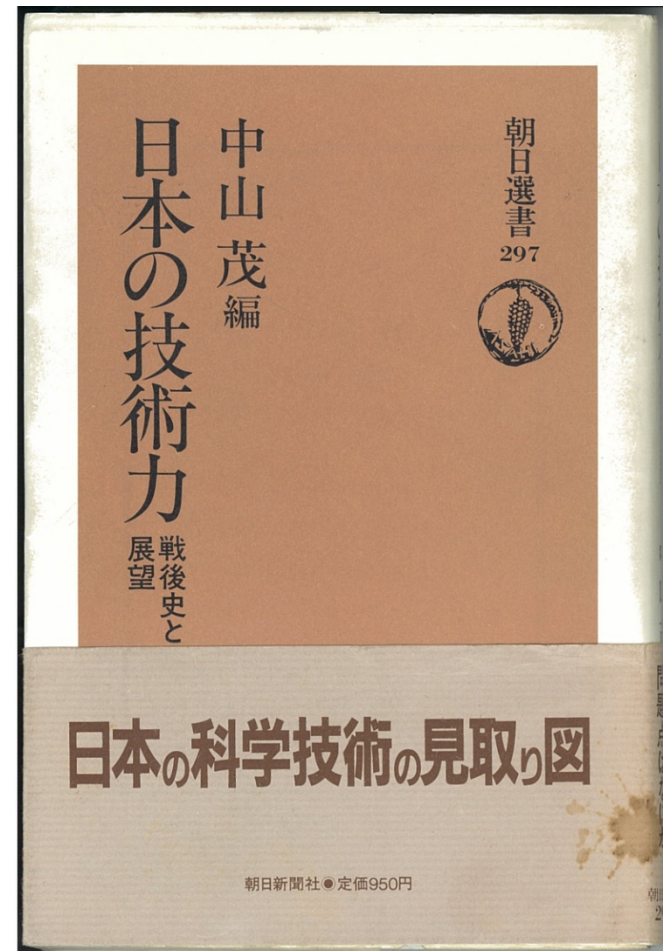
氏名索引 ○岡田家武

植村 琢 228, 426	林 茂 助 888
遠藤完太郎 298, 371, 374	原 賢 次
○岡田家武 720	平尾子之吉
小野田 忠 28, 120, 469, 513, 606	藤井毅太郎
柏木 一 三 656, 785	堀内壽郎
加藤多喜雄 486,	堀内利器
嘉納吉彦 13, 452	眞島利行
倉田正郎 88	增本文吉
小松 茂 1, 6, 88, 88	箕作新六
齋藤正一郎 115	水島三一郎
鮫島實三郎 715	○南 英 一
柴田 榮 一 528	森尾 森 一
柴田 善 一 198, 342	山口昌三
杉野日晴貞 492, 586, 616	山口文之助
高橋 梯 藏 622	渡邊卓郎
○田崎友吉 284, 432, 484, 586	渡邊實松

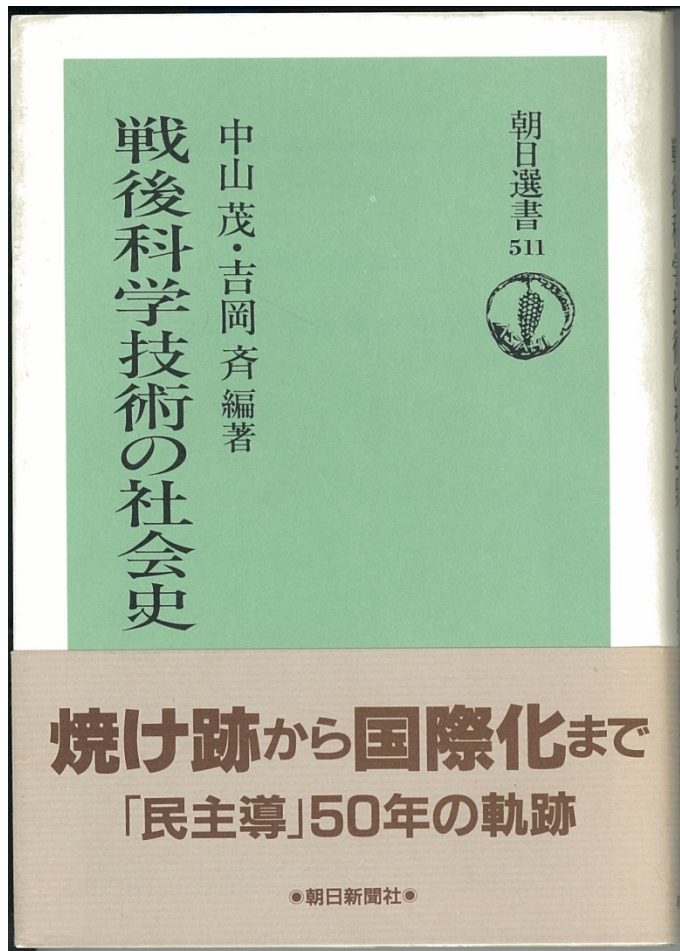
197

戦後科学技術史プロジェクトとは

- 日本科学史学会編『日本科学技術史大系』通史編第1～5巻(1964)
- 国立国会図書館による米国国立公文書所蔵のGHQ/SCAP文書の撮影収集(1978～1990)
- 中山茂代表「**科学と社会フォーラム**」(トヨタ財団助成、1982～1991、助成総額4940万円)
- 戦後科学技術の社会史→『日本の技術力』(1986)
<官><産><学><民>の4セクターの力関係で、科学技術の型と方向が決まるとの視点を打ち出す。
八耳は巻末年表を担当。



『通史 日本の科学技術』のプレビュー



- 科学と社会フォーラムは『エコノミスト』に「テクノヒストリー半世紀」を70回連載（1990.4.3～1991.9.3）
- 単行本にまとめたのが、中山茂・吉岡斉編著『戦後科学技術の社会史』（1994年）26人執筆。占領期から1980年代までを扱う。
- 八耳は「地質学会の民主化」「第一次南極観測隊の成功」を執筆。

『通史 日本の科学技術』全4巻

(学陽書房、1995年6月20日発行)

構成

〈戦後日本の科学技術の社会史〉

- 第1巻 1945-1952年
 - 第2巻 1952-1959年
 - 第3巻 1960-1969年
 - 第4巻 1970-1979年
 - 別巻 総索引・年表
-
- 1995年毎日出版文化賞特別賞受賞

『毎日新聞』1995年7月25日夕刊



『通史 日本の科学技術』以後

続巻の刊行

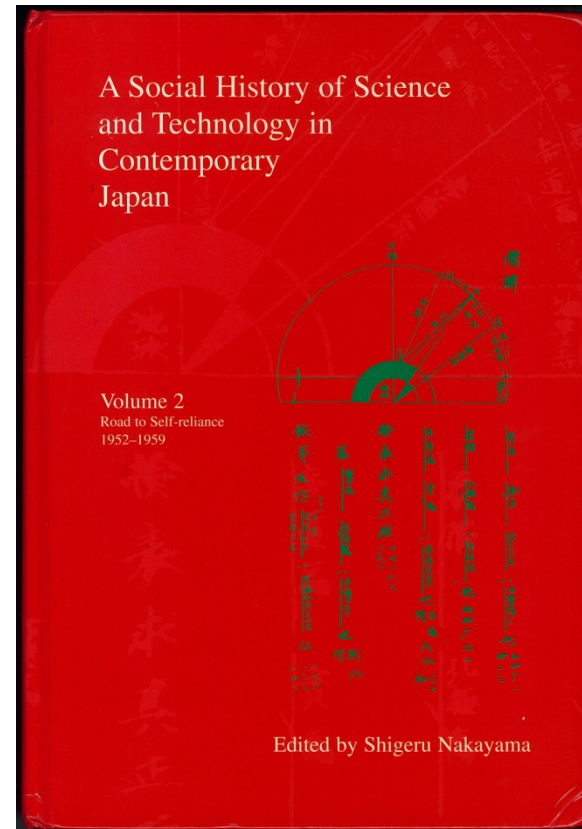
- 1980-1995年期

『通史 日本の科学技術』
第5巻(2冊)＋別巻(学陽
書房、1999) 中山茂・後
藤邦夫・吉岡齊責任編集

- 1995-2011年期

『新通史 日本の科学技術』
全4巻＋別巻(原書房、
2011) 吉岡齊責任編集

英訳本刊行全4巻(2001-2006)



「学界の民主化とレッド・パージ」の執筆(その1)

- レッド・パージとは、占領末期に共産党員およびその同調者が公共機関、民間企業から大量に追放された事件。官民合理化を至上目標とする流れの中で起きた思想差別。
- イールズ旋風。共産党員は大学の教員たる資格はない。→ 日本の大学人の責任。
- 科学者の社会的責任
- 公職追放とは、BC級戦犯とは

「学界の民主化とレッド・パーージ」の執筆(その2)

- 文化国家から民主国家へ
- 素粒子論グループ
- 地学団体研究会
- レッド・パーージ
 - 行政整理と企業整備/教育界のレッド・パーージ/朝鮮戦争とレッド・パーージ
- 今後のレッド・パーージ研究の課題
 - 個人の内面の自由と、科学・科学者の社会的機能の認識

「南極観測」の執筆

- はじめの予定では学術探検の章
- 京大学士山岳会の活動、梅棹忠夫、今西錦司ら。文化人類学、地理学、生態学、地学
- 構成 国際地球観測年/朝日新聞社提唱南極観測/政府事業としての南極観測
- 南極探検(民が支援)か南極観測(官が支援)か。科学に果たす民と公の役割。
- 西堀栄三郎と永田武

完成できなかった「占領軍の科学技術政策」

- 当初の予定では、GHQ/SCAP経済科学局・科学技術課を中心に、占領軍の科学技術政策を概観するつもりだった→資料膨大でまとめられず
- 研究成果は基礎資料として、『通史 日本の科学技術』第1巻末「付録1～5」に収録された
 - 占領史研究会との連携
- 同課基礎研究班長ハリー・C・ケリー研究進む
- ボーエン・C・ディーンズ『占領軍の科学技術基礎づくり: 占領下日本 1945-1952』笹本征男訳

現代史執筆と資料問題

- 現代史執筆の困難
研究プロジェクト参加を辞退→1945年研究から1845年研究に専心。洋学史研究、19世紀入華宣教師の科学啓蒙活動研究へ
- 資料問題：収集した資料をどのように残すか
未解決に終わった(アーカイブ案、資料集案、CD案、等)→ 個人保管、一部出版社保管に
原稿は本文＋資料解題からなり、基礎資料の案内はおこなった。→ **配付資料参照**
- プロジェクト成功の要因：
中山スクールの成立。トヨタ財団による助成。